

『鍼灸の挑戦』(岩波書店刊) を読んで

いしだひでみ
九州国際大学教授 石田秀実

待ち望まれていた書物

これは松田博公という稀有なジャーナリストの心の鏡に映った現代鍼灸界の大曼荼羅である。彼の心の鏡がいかにも温かいものであったため、そこに映った鍼灸の姿は、好意に満ち溢れたユートピア的なものとなっている。古典派の鍼灸に深い思い入れを持ちながらも、それにのみ偏ることなく、鍼灸界を満遍なくルポしたその努力には頭が下がる。だが逆にそのことが、百花繚乱状態の鍼灸界にあって、誰もが自分こそ正しいと信じている（経験医学の帰結である）鍼灸師たちの不満の種になるだろうことも想像に難くない。保険に組み込まれていないことや、学校の乱立状態に比して就職が限られ、怪しげな癒しビジネスに流れていかざるを得ないことなど、ここに取り上げられていない問題を挙げればきりがないだろう。だがそうした社会学的問題については、また誰かが専著を書けばよいことだ。一般人が待ち望んでいたのがこうした網羅的な紹介書であることは間違いない。身近なようで実態の定かでない鍼灸の全体像を描いてくれる書を、誰もが待ち望んでいたのだ。

8章からなるこの書物の構成は、以下のようになっている。まず第1章で鍼灸が自然治癒力を基礎とする「もうひとつの医学」であることを力説する。そして第2章で、「身体を流れの

システムとして構成する」経絡について解説する。ついで第3章で鍼灸の術のさまざまを紹介し、一転して第4・5章で鍼灸を物質科学的に解明しようとする人々を追う。そして第6・7章では生活の中に息づく鍼灸の姿を伝える。最後に鍼灸の医学が示唆する哲学に触れて終わる。これらすべてがルポルタージュの形で語りつくされていることに人はまず感銘するだろう。

ここでは本書の豊かな記述に触れて、評者が考えたことをいくつか記してみる。

人間機械論とオートポエイシス論

現代医学は、人間の身体を機械とみなすことによって成功を収めてきた医学である。生命体である人間の身体を機械とみなすのは、明らかにフィクションである。だが、こうしたフィクションに基づいて、人間の身体を部分に分けて考え、機械を直すように、壊れた部分を治す現代医学の技術が完成したのだ。

ところで機械と生命体との違いは、どこにあるのだろうか。現代生物学が夢中になっているDNAによる複製の働きだろうか。でも、同じものを複製することなら、機械にもできる。予期に反して、複製という働きは、生命に本質的なものとは言えない。

機械と生命体との一番大きな相違として、今考えられているのは、オートポエイシスという

働きの有無である。オートポイエシスとは、自分自身で自分を代謝し養い、制作していく働きのことである。ようやく動けるようになったこのごろのロボット君達のことを思い出そう。彼らは確かに少し間抜けな生命体のように動いてみせる。でも彼らから電池やコードを抜いてしまったらどうなるか。彼らはまったく動けない。自分自身で自分を代謝し養うオートポイエシスの働きがないからだ。

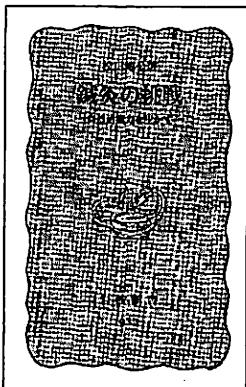
オートポイエシスの働きを持つ生命体は、自分自身で自分の身体全体を養い、新しく組織し、変わり行く環境に合わせて絶えまなく身体全体のバランスを取って調節していくことができる。

機械はそうはいかない。なるほどコンピュータは、あらかじめ組み込まれたソフトの範囲内でなら、ある程度のことをやってくれる。でも想定外の出来事や環境に遭遇したらお手上げである。

機械のフィクションに基づき、人間の身体を部分に分けて修繕する現代医学の泣き所もここにある。部分を修繕するのはお手の物だ。だが、その修繕の結果、全体の調節作用や働きがおかしくなる可能性を、この医学は思いつかない。機械ならば、壊れた部分を直せば、元に戻るはずだからである。

鍼灸医学の身体フィクション

鍼灸医学は、身体を機械とみなすフィクションを取りしない医学である。鍼灸医学では、本書にもしばしば登場する鍼灸医学家の井上雅文氏がいうように、身体を「いつも変わり続けながら自分自身を養い守る流れ」のフィクションでとらえている。この「流れとして身体をとらえるフィクション」は、「機械として身体をとらえるフィクション」よりも、生命体の本質であ



松田博公 著

鍼灸の挑戦 ー自然治癒力を生かすー

岩波書店 新書判並製 208頁 定価735円（税込）

るオートポイエシスを良くとらえているフィクションであることにお気づきだろうか。

鍼灸医学が注目されねばならない理由もここにある。部分に分けて、ある場合には対症療法的にあれ修繕することならば、現代医学は成功を収めた。でも、人間は機械ではないから、こうしたフィクションと方法では、治らない事象がたくさんあるのだ。

そればかりではない。部分を切り分け、修繕することによって、かえって全体のオートポイエティックな働きをおかしくしてしまったり、修繕が原因で別のところがおかしくなったりすることもたくさんある。機械フィクションに基づく現代医学の泣き所である。

その意味では、鍼灸医学は、単に現代医学の補完医学であるのではない。現代医学の部分品修繕的方法を反省し、生命体としての身体をとらえなおす「もうひとつの医学」として、現代医学と併用されねばならない医学であるはずなのだ。

機械のフィクションで身体を語るとは、本当は変化し続けてやむことのない生命体を、変化

しないいくつもの部品からなる同一性を持つ機械に置き換えて記述することである。変化し続ける生命体そのものの姿は、論理的な言葉や、そのより形式的に整えられた姿である化学式や数学式では記述しにくい。数学式も含めたそうした「言葉」は、通常「変化しない同一性を帶びた存在者」の形でしか、事物を記述できないのだからこれは仕方がない。

機械のフィクションで語ることができるのは、「変化しない部品」に置き換えられるような現象だけである。そして生命体の現象のかなりの範囲は、「変化しない部品」に置き換えて記述することができない「非同一性を帶びた変化し続ける」現象である。機械のフィクションで身体を記述する現代医学が、華々しい成功にもかかわらず、ある領域ではほとんど効果を示せないでいるのはそのためである。

もっといえば、科学という方法論は、「変化しない部品」に置き換えて記述できる事象に限定して世界を語ることによって、応用の面で大成功を収めた方法論なのである。その外側には「変化しない部品」に置き換えて語ることのできない事象が数限りなくある。21世紀はそうした欠点を振り返り、機械のフィクションの外側に残しておかれた領域について考え直してみる時代だといえる。機械のフィクションで身体を記述するまなざしだけではなく、生命体の本質により近い「流れのフィクション」で身体を見るまなざしをも併用しなければ、生命事象のかなりが、語られないままに脱落してしまうのだ。



自然治癒力の医学ということの意味

自然治癒力を売り物にする医学は、現代ではさまざまな代替医学のみならず、統合医学などと称される何でもありの混合医学にもおよび、

枚挙に暇がないといってよいほどである。そこでは自然治癒力を「人が用いている」ことが、あたかも新しいユニークな特徴のごとく語られている。だが、そもそもどんな医学も生命体の身体そのものに備わるオートポイエティックな自然治癒力によって成り立っていることは自明なことである。抗生物質の使用や先端医学の手術、まだ危ういレベルの遺伝子治療さえ、術前・術中・術後に働く自然治癒力のおかげで医術として成り立っているのだ。だから「自然治癒力を用いる医学だ」ということは、現代医学を含むあらゆる医学の共通項なのであって、鍼灸だけの特徴だというわけにはいかないだろう。

では同様に自然治癒力に依拠した医学でしながら、鍼灸の何が他の医学、とりわけ現代医学と異なるのか？

それ自身で自己を制作・維持するということが認識できる「流れの身体フィクション」を自覚し、それに基づかなければ、自然治癒力というオートポイエティックな働きを本当に肯定的に評価することはできない。「それ自体では動かない機械」という身体フィクションに依拠した現代医学は、人為だけで身体という機械を修復しているような錯覚にとらわれている。依拠する身体フィクションの定かでないいくつかの代替医学や統合医学も、自然治癒力を「人が能動的に用いる」道具か、さもなければ魔法のように記述して、人が関与しなくとも空気のようにいつも働いている生命体の自然治癒力そのものの姿を見失ってしまいがちだ。

他方、鍼灸という医学は、オートポイエシスという生命の特徴を正面からとらえ、「変化やまない非同一性を帶びた流れ」の身体フィクションに基づいて自然治癒力を把握する。自然治癒力は、人が用いる功利的な道具や不思議な力ではなく、生命自身の本質として把握され

ているのである。

他の代替医学が認識できなかった自然治癒力を含むオートポイエティックな全体の流れを、経絡の流れの形で身体に認識することができたのは、こうした身体フィクションと結びついた自然治癒力の本質的認識があったからである。

機械的身体フィクションは、身体を部分品からなる機械とみなして、解剖学的身体図を描いた。一方、鍼灸医学は、オートポイエティックな生命の本質を把握して、その自己組織的な働きを経絡の流れる身体として描いたのである。

自然治癒力を前面に出しながら、本書のいくつかの記述が、鍼灸医学のこうした特徴を必ずしもうまく把握しきれていないのは残念なことである。たとえば身体の治癒機序を部分的・因果論的にばかり語ることは、全体のオートポイエティックな流れとしてとらえたはずの身体を、原因一結果の仕組みで動く機械に置き換えてしまうことになりかねない。だが、本書でも機械論的に部分を分けて追いかけ、原因一結果論で自己の術を語る鍼灸医家の姿があちこちに現れる。変わり続ける全体の流れを類動パターンで捉える鍼灸医学本来の方法論はどこかに消え、変わらない実体=機械として身体を認識した「現代医学の亜流としての鍼灸」がそこに産まれてしまっていることを、筆者はどこかで指摘すべきだった。

物質科学的解明とは

物質科学で、すなわち「機械のフィクションで」鍼灸を解明する動きの記述については、たくさん不満が残る。物質科学で語るとは、「同一性を帯びた物質と機械として記述された身体」という異なる身体フィクションに置き換えることだということへの自覚が、希薄なので

ある。そこからは、それでもなぜ現代医学の機械論的身体フィクションではなく、鍼灸の身体フィクションや鍼灸の古めかしい道具を用いるのかという疑問への答えは出てこない。

それどころか、古い鍼灸がようやくスタンダードな(?)現代医学の真理(?)に置き換えられた、すべては機械フィクションで説明できるはずだという現代医学中心主義につながっていきかねない文脈があらわになってしまう。

科学的解明と「単なる言いかえ」とが、しばしば混同されている記述も困りものだ。たとえば本書P.115の「トリガーポイント理論こそツボの科学的解明の有力なヒント」という記述を見よう。トリガーポイントはアメリカのカイロプラクティックという代替医学が、鍼灸同様経験的に認識している特異点である。その経験的特異点と、やはり経験的特異点としてのツボがかなりの確率で一致したという記述は、なんら科学的解明について語るものではなく、「ふたつの経験的代替医学間の言い換え可能性」を指摘しているだけだ。その後のポリモーダル受容器仮説は、このことと直接的に関係するものではない。

この記述から、ツボはトリガーポイントとして「言い換え」可能かもしれないということは言えても（ただし依拠する身体図式はまったく違うが）、そのことと科学的解明とはとりあえず別のことのはずだ。なによりこの記述からは、肝腎の「流れとしての経絡」の科学的解明の可能性は、まったく出てきようもない。

自律神経調整と鍼灸の自然治癒力を結びつけた安保理論にしても、井穴刺絡と免疫細胞との関係は鍼灸師の経験同様に、経験・現象論として解明されたにすぎないことを銘記すべきだ。

たしかに自律神経と免疫細胞という機械論的部品によって、身体の「全体論的働きのひとつ」

が、鍼灸と経験論的に結び付けられた形で記述されたことは喜ばしい。だが、鍼灸そのものと免疫細胞の増減現象との間の因果論的機序が、機械のフィクション＝科学で解明されたわけではない。

というより鍼灸の医学とそれが前提している変化流動し続ける非同一性を帯びた身体フィクションは、同一性を帯びた不変の物質を単位とする機械的実体モデルの因果機序では、やはりうまく記述できないのではないか。本書P.175で登場する浅見鉄男医師が言うように、「なぜ左右の異なる井穴のあるものが、交感神経に効き、あるものが副交感神経に効くのかの科学的しくみはわからない」のが現在のところの現実なのだ。そのところをあいまいにしたいたずらな科学的解明への期待は、誤解の源になるだけだといったら酷であろうか。

鍼灸の標準化設定という問題が抱える困難も、ここに起因する。なるほど日本には鍼灸の標準化がない。けれども現代中国で進められている強引な教科書的標準化に多くの問題があること、肝心の老中医と称される経験豊かな中国の鍼灸医の多くが、新しい標準化に批判的であることは周知のことであろう。

現代医学のEBM（証拠に基づいた医学）主義に基づいて進められている国連主導の標準化も、問題だらけだ。EBMという方法は、機械的身体フィクションに特有の因果論と、統計学というそれとは相容れないはずの方法とが結合した怪物である。統計学は実験結果に因果論的秩序が見出せないときに用いられる方法だから、因果論と結びつけること自体が本当はおかしいのだ。そうした方法の無反省な流用から作られる標準では、鍼灸の本質の切捨てになることが予想される。

やみくもに現代医学的な意味でのスタンダードを作ることが、必ずしもよいとはいえないのである。鍼灸の標準化を考えるなら、まず科学的な意味でのスタンダードという概念そのものの吟味から考え直すことが大切である。豊かで多様性を許すフレキシブルなスタンダードといった、従来の標準の定義を覆すスタンダードが求められているのだ。

「薬のいらない安価な医学」の意味

鍼灸のもうひとつの特徴は、薬のいらない経済的な医学ということである。医療費の高騰に苦しむ先進福祉国家も、経済の悪化に苦しむ発展途上国も、このことに鍼灸の大きな意味を見出している。その意味では、現在鍼灸が注目されているといっても、そのほとんどは、医学というより経済的な意味においてであることは自覚しておいたほうが良い。政治の介入しやすい公的保険ではなく、費用対効果をまず考えるアメリカの私的保険が、鍼灸に注目したのは象徴的な出来事だ。

こうした「セルフケアの医学」や「安価な草の根医学」としての鍼灸医学評価は、確かに現代社会において重要なことである。だが、そこには手放しで喜べない側面もある。

現代消費社会は、一方で福祉国家としての性格を次第に薄くしようと必死になっている社会でもある。国家が何でも誰にも手を差し伸べることは、次第に「国家の利益」と称される「誰か達の利益」に反するものとみなされるようになっている。A. ギデンスらが言うように、国家は自己に有利な事柄にだけ投資する社会になっていきつつある。

そこでは福祉や医療は階層化され、高額な医療はそれを支払える層だけのものになる（いま

でも先端医療や薬品は第三世界と無縁である)。自己責任に基づいて自分で自分を律するというリバタリアンお得意のフレーズは耳に快いが、自己責任を取れない、自分でケアできない人々は捨てられるということもある。

鍼灸が安価な医学として導入されても、高額な先端医療がなくなるわけではない。ただ、それはそれを支払える人々だけのものとなるのだ。それを支払えない人々は、たとえば鍼灸医学やハーブ医学でしのげということになったとき、それでも鍼灸の再評価と現代医学への導入はすばらしい、とばかり言っていられるだろうか。かつてM. フーコーは近代権力の自己訓育的性格について論じた。その自律の形を取った権力意思が、今リバタリアン言説と福祉切捨て、小さい政府論として大手を振ってまかり通っているのである

一方で鍼灸医学は、こうした自己責任論や自律とは正反対の方向からも、現代医学に導入されようとしている。「鍼灸というもうひとつの医学」を導入することによる「差異の卖込み」である。現代資本主義社会は、世界中どこでも似たような商品を売る中で、「ほかとは違う差異ある商品」を売り込むことで、利益を生み出すことを身上とする社会だからだ。医療という商品も例外ではない。

そこで鍼灸は、エキゾティックで不可思議な力を發揮する、気功やヨーガのような金持ちは向けの「ブランド医療商品」である。こうした方向での再評価も、鍼灸医学にとって喜ぶべき事態なのかどうか、考えてみる必要があるだろう。

(〒811-4223 福岡県遠賀郡岡垣町山田峰1-12-3)

新鍼法の一本鍼 ビデオ 2巻セット

誰でも再現できる現代医学の鍼

出演：長尾 正人 セット価格 本体12,600円(税込) (分売不可)

「捨鍼しない」「雀啄しない」「響かせない」

新鍼法はこれまで鍼灸界の常識だった鍼術を施さない。現代解剖学（神経障害論）に基づいて症状把握を行い、脊柱直側の鍼と各種一本鍼を駆使する。施鍼方法は直刺して置鍼するだけ。至って単純明快、名人でなくても誰でも再現できる現代の鍼である。

本ビデオでは、新鍼法の中でも特に有効性の高い一本鍼をピックアップして構成。その魅力に迫ってみる。

[PART 1] 29分

長尾式肩鶲の一本鍼／胃の一本鍼／大腸の一本鍼／小腸の一本鍼

[PART 2] 38分

目の一本鍼／脅の凝りをとる一本鍼／弾発指の一本鍼／五十肩の一本鍼／肋間神経痛の一本鍼／膀胱炎の一本鍼

主な内容

